

## 「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿<3月15日（金）放送分>

### テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は、毎月第3週に、奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介するシリーズ「郷土の偉人」の12回目（最終回）です。

3月に入り、1日には高等学校、13日には中学校の卒業式が行われ、本日15日には大島養護学校、来週22日には小学校の卒業式が予定されています。高等学校を卒業した方々の中には、進学・就職などで島を離れる方も多いことと思います。

その時の交通手段として、島民に最も親しまれているのが船ではないでしょうか。

今朝は、たった一代で「南海の海運王」と呼ばれるまでになった大島運輸株式会社の設立者「有村治峯<sup>ありむらはるみね</sup>」を紹介します。

有村治峯は、明治33年6月15日、与論島の茶花で、父里静<sup>さとせい</sup>、母チヨの間に生まれま<sup>しら</sup>した。生家は、三度の食事にも事欠くほど貧しく、治峯は小学校を卒業すると名瀬の白石商店に住み込みで見習いの仕事を始めました。

治峯の母チヨは、子供のしつけや教育にはとても厳しく、治峯の兄弟は「人の悪口を言った時は、（反省して）小さく曲がって寝なさい。人に悪口を言われても（自信を持って）大の字になって寝なさい。」と諭されて育ちました。今でも「誠の島<sup>まこと</sup>」といわれる与論島ならではの母の教えです。

このような母の教えのせいでしょうか、治峯は、まじめで骨身を惜しまない働きぶりに白石家の厚い信頼を受け、見習いからわずか2年で番頭に取り立てられました。

当時の白石商店は、黒糖の取引を中心に食料品、雑貨、呉服の販売まで幅広い商売をする総合商社のようなもので、5年間勤める中で治峯は商売のいろはから経営の基本までみっちり勉強しました。

その後22才で独立し、黒砂糖<sup>なかがい</sup>の仲買と大島紬<sup>じんしんきえい</sup>の製造販売を始めました。大島紬については、最盛期には年間3,500反も生産する新進気鋭の実業家となり、大島紬工業組合の理事長にも就任しました。

黒糖についても、島民の生活を守るためにはサトウキビ栽培を一番大切にすることが自分の仕事だと考え、出身地の与論島に大型製糖工場の南島開発株式会社を設立して貢献するとともに、北大島地区の笠利町でも富国製糖株式会社の経営を引き受けて奄美特有の産業を育てることに力を尽くしました。

治峯が大島運輸株式会社を設立し、本格的に海運業に乗り出したのは、奄美群島が日本に復帰した昭和28年12月のことです。それから復帰に伴う国の奄美群島復興特別措置法の追い風を受け、次々に船舶の建造を行いました。

また、昭和33年9月には、鹿児島から奄美各島を経て沖縄に至る航路の免許を日本で初めて取得し、三隻の新造船を就航させました。これが、現在私たちが慣れ親しんでいるAラインです。

それからは、ライバル会社と切磋琢磨しながらも「離島航路を守る」ということを常に考え、事業に反映させていきました。

有村治峯は、平成12年11月7日に百歳の天寿を全うして永眠されました。その年の6月15日に開かれた百歳祝いの席で「自分の今日を築いた源」として三つのことを話されたそうです。

その一つは、「学歴のなかったこと」そのおかげで人一倍努力して、いろいろな人と話したり人の話をよく聞いたりして知らないことを覚え、また六法全書も何度も読んだということ。

二つ目は、「家が貧乏だったこと」そのおかげで何事も我慢することを覚え、お金や物のありがたさと値打ちが分かったこと。

三つ目は、両親から「丈夫な体をもらったこと」そのおかげで今日まで長生きすることができたと父母への感謝の心を持つことができたことです。

三つの話に共通するのは、「おかげで」という言葉です。「学歴がない」「家が貧しい」といった決して「おかげさま」とは思えないことでも、それを前向きにとらえて人生の糧にして努力しておられたのでしょうか。

また、生前によく話された有村語録として、『郷土の先人第5集』において、<sup>くすだとはる</sup>楠田豊春氏は、次の二つの言葉を紹介しています。

一つ目が「物事の判断を誤るな」という言葉です。昔から人生は出会いが大事だといわれていて、進学も就職もすべて、出会った人とどのようにつきあっていくかの判断次第で結果が変わってきます。将来がどうなるのか予想するのが難しい時代、それだけに、より一層社会の移り変わりや様子を深く勉強して、正しく判断していくことが求められています。

二つ目が「過去を語るな。未来を語れ」です。過去の話は経験した話としては参考にはなるが、明日への見通しや夢は湧いてきません。お互いに未来を語ることによって興味が湧き、希望が出てきます。絶え間なく移り変わる世の中において、20年後、30年後を見据えて行動しなさいという教えです。

このほどまとまった「10年後の奄美のあるべき姿」を描いた「奄美群島成長戦略ビジョン」の柱である「若者がチャレンジし、夢を実現する島」、「すべての島ちゅが主人公として活躍する島」、「世界の人々に魅力を伝える宝の島」の実現にむけ、新しいステージに立つみなさんにエールを送る意味で、今回は、有村治峯を紹介しました。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。